



魅力ある工学部を目指して

工学部長 里中 忍

2010年11月20日から、工学部長を務めることになりました。「かけはし」創刊時の「堅苦しい情報発信より、身近な工学部情報を分かりやすく」の精神で、これからの工学部について日頃考えていることを少し述べたいと思います。

基本的には、両角前工学部長の活動を引き継いでいきます。ただ、学生や大学さらに日本を取り巻く環境にはグローバル化、そしてそれに伴う変革の波が押し寄せています。例えば、学生や保護者にとって「就職」は重大な関心事です。大学にとっての課題は、少子化・高齢化社会、理科離れ、ゆとり教育世代といわれる中での魅力ある教育研究活動の拠点づくりです。また、アジア諸国の技術力アップと世界展開、円高による日本企業の海外進出など、日本の経済活動の変化や国際化の波が大学の教育研究活動にも影響を及ぼしています。この状況はスポーツの世界に良く似ています。スポーツの世界では、日本選手が欧米のプロチームで活躍する時代になり、国内チームには様々な工夫が迫られています。大学の取組みも同じです。工学部の教育研究に関する取り組みをスポーツの世界と対比させながら紹介します。

まず、工学部で取り組んでいる教育の重要な柱は、教育の質を保証することです。プロスポーツの世界では、選手は個人やチームの成績で給料をもらっています。一流のプロ選手は基礎と応用を身につけ、チームプレーや応用プレーにも対応できる能力を持っています。学生が就職することは、スポーツ選手がプロになるのと同じようなもので、その分野の専門家(プロ)になることです。大学における教養教育、専門基礎、専門的教育ではプロとしての基礎と応用を学びます。卒業の際に重要なのはプロとして活動するための能力です。工学部では、ほとんどの学科で教える内容が日本技術者教育認定機

構(JABEE)や環境ISOの認定を受けて、教育の質が保証されたカリキュラムとなっています。一方、大学は義務教育ではありません。学生の自主、自立を育む教育を考えています。また、能力や意欲のある学生を伸ばす教育環境を整備することも重要です。本学では「理数学生応援プログラム」、ものづくり教育の実践の場として「革新ものづくり教育」事業を平成23年度からスタートします。やる気のある学生はこれらのプログラムに参加して意欲、能力を伸ばすことができます。国際化も意識しています。外国語運用能力を高めるためのプログラムも今秋にはスタートさせる予定です。このような環境を整備しても、スポーツの世界と同じように、その基礎と応用を身につけるのは学生です。一人ひとりが努力する以外に方法はありません。その成果として進路(就職先)が決まっていきます。ただ、時には周囲の情報に惑わされて、どのようにすればよいのかわからない学生がいます。学科の先生方も注意しながら指導していますが、保護者の皆様も学生が伸び伸びと成長することを応援してください。

紙面の都合で紹介できませんが、研究活動、国際交流、社会貢献は教育活動の基盤となるもので、教職員、学生が一緒になって一流を目指して活動しています。パルスパワーや衝撃、KUMADAIマグネシウム合金などはその代表的なものとなっています。

村山伸樹、尾原祐三両副学部長の協力を得ながら、上記の活動を実践していきますので、ご協力、ご支援よろしくお願いします。



Feature Articles

- 01 魅力ある工学部を目指してP1

Events

- 02 夢科学探検2010P2
03 コンテスト報告P2
04 工学部運動会P3
05 国際学生会議 (ICAST)P3
06 第8回熊大フォーラム (ハノイ)P4

Information

- 07 学科便り マテリアル学科P5
08 学科便り 情報電気電子学科P5

Voice Information

- 09 卒業生の声P6
10 卒業生の進路状況P6

夢科学探検2010

平成22年度 工学部学生支援委員長 奥野 洋一

平成22年10月30日(土)に、「夢科学探検2010」が開催されました。夢科学探検は、未来を担う子供たちに、科学技術のおもしろさを体験してもらうことを目的とした黒髪南地区最大の催しです。本年度の夢科学探検は、「理学部探検」、「工学部探検」、および「もの・クリCHALLENGE」の三部構成で実施されました。

本年度は昨年を多少上回る100件の展示があり、小学生、中・高校生、保護者および一般市民などの入場者数は2千名を超えました。各会場は午前10時の開場から午後4時の閉場まで盛況で、大成功のうちに行事を終了することができました。

会場の片付けを終えた後は、午後7時30分から百周年記念館で懇親会が開催されました。300名を超える教職員、学生、お

よび協賛団体の代表者が出席し、恒例の化血研賞の発表で大いに盛り上がりました。

夢科学探検2010の成功は、ご協賛やご後援をいただいた企業ならびに団体からのご支援、および学長の英断による援助が大きいのと考えています。また、理学部、工学部、および自然科学研究科の教職員と学生には、この催しの企画・運営に多大な協力をいただきました。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。



コンテスト報告

革新ものづくり教育センター 准教授 大瀨 慶史

一学生創発ものづくりコンテスト * もの・クリCHALLENGE 2010 *

「もの・クリCHALLENGE」は「自由な発想」を競うコンテストです。製作部門(アイデアを実際に製作する作品)とアイデア部門(デジタル作品やアイデア提案など、製作を伴わない作品)の2つに分けて開催しています。今回は「快適な生活」をコンセプトに、テーマは製作部門がパーソナルスペースを対象にした「私の快適アイテム」、アイデア部門がパブリックスペースを対象にした「キャンパスサイン」で、製作部門18件、アイデア部門14件の参加となりました。学園祭で一般公開の審査会が行われ、地域の子もたちや学外からの見学者も投票ができます。世界にひとつの創造性豊かな作品たちは、今年も見学者に夢や

興奮を与えることができたようです。製作部門の最優秀賞は「あしをつかいマウス」(機械システム工学科 江藤利宏君)が受賞。両手が塞がっていても足で操作でき、マッサージ効果もある足用PCマウスを製作しました。優秀賞ではノックのボタンによって施錠登録と開錠ができるドア「knock lock」(マテリアル工学科 高松洋平君)、アイデア部門の優秀賞は、駐車場の空き状態を検知しライトで道を照らして誘導してくれる「駐車誘導信号路」(代表:情報電気電子工学科 東英和君)、学内の駐輪場とサインの提案により「おしゃれで楽しいキャンパス」を目指した「熊大内駐輪問題改善企画」(代表:社会環境工学科 西川真哉君)が表彰されました。



記念写真



knock_lock



あしをつかいマウス



駐車誘導信号路



熊大内駐輪問題改善企画

一学外コンテスト優秀技術賞受賞一 * TOKIWAファンタジア'10 イルミネーションコンテスト *



宇部市の常盤公園にある「ときわ遊園地」において、宇部市、山口大学などが主催する冬のイベント、「TOKIWAファンタジア'10」が平成22年12月4日～28日まで開催されました。このメイン行事であるイルミネーションコンテストに、熊本大学工学部ものづくりセンターから2作品を出品しました。製作者は自然科学研究科の天辰祐太郎君(建築学専攻:造形担当)と小川智也君(物質生命化学専攻:電気系統担当)です。

いずれも工学部の技術を活かして、人感センサや音センサを利用したインタラクティブな作品になっています。そして審査の結果、これらの作品が優秀技術賞を受賞しました。人感センサを3個使用して、人が近づくとき発光パターンを変化させる技術が高く評価され、審査員全員一致で決まったとのこと。12月25日には、クリスマスフェスタIN TOKIWAファンタジアが開催され、イルミネーションコンテスト入賞作品の表彰式も行われました。式には地元の多くの市民が集まり、熊本大学のものづくりに関する取り組みを見てもらう良い機会となりました。



一昨年に見事復活を果たし、今回で第3回となった工学部運動会が平成22年10月10日(日)午前9時から熊本大学運動場(武夫原)にて開催されました。今回の工学部運動会は『楽しんでゃえばよかろ〜もん!』



をテーマに、サポーターを含めた参加者全員が楽しむことができる運動会を目指し、4月から企画に取りかかりました。また今回の運動会の目玉として、応援団

の復活を実現させるべく、工学部学生会メンバー丸となり準備を進めて参りました。

前日からの雨で一時は運動会の開催も危ぶまれましたが、当日は好天に恵まれ800名を超す学生と両角工学部長をはじめとする多くの教職員、各学科のOBなど多くの参加を得た大運動会となりました。競技では玉入れ・障害物走・長縄跳び・じゃんけん列車などのみんなで楽しめる競技のほか、綱引き・棒引き・学科対抗リレーなど各学科の威信をかけた激しい競技、はたまた男子に大人気のフォークダンスなど全12競技が行われました。また、今年が目玉である応援団は社会環境工学科(旧土木団)とマテリアル工学科(旧採治団)のみの参加ではありましたが、無事復活を果たし、両団ともに素晴らしい演舞を披露。運動会を盛り上げ、競技者の志気向上に一役買いました。

競技中は参加者・サポーター共々、白熱した勝負に一喜一憂し、



時には笑みも見受けられ『楽しんでゃえばよかろ〜もん!』のテーマ通り、参加者全員が楽しめたようです。競技の結果、見事に第3回工学部運動会の優勝に輝いたのは社会環境工学科、準優勝はマ

テリアル工学科、3位は機械システム工学科となりました。

最後になりましたが、工学部運動会にご参加頂いた皆様方にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。今後とも工学部運動会のご支援の程、よろしくお願いいたします。



工学部学生会の紹介

工学部学生会は、今から6年前に結成されました。結成当初は、各学科の学生組織の連絡会という形でスタートしましたが、現在では工学部運動会の企画・運営をはじめ、さまざまな活動を行っております。今年度の主な活動内容としては、工学部運動会の企画・運営、工学部キャンパスでのマナーアップキャンペーン、工業会会誌にて学生企画コーナーの担当、サマープログラム(海外提携大学短期滞在研修プログラム)のお手伝い、工学部長との懇談会、エコキャップ活動への参加などが挙げられます。今年度は新たな活動も増え、年々活動規模が大きくなってきております。しかし、工学部学生会の人数自体はほぼ変わっていないため(平成21年度:17名、平成22年度:18名)かなり大変な部分もありましたが、工学部学生会メンバー丸となり、日々着実に活動してまいりました。その結果が、工学部運動会の成功や、各所での褒めの言葉をいただけたことに繋がっているのではないかと考えております。

工学部学生会の活動は今後、より一層活発になると思います。また、来年度のメンバーにはぜひ工学部が全学の先頭に立って活動していけるよう、頑張ってもらいたいと考えております。今後とも工学部学生会へのご支援の程、よろしくお願いいたします。

大学院自然科学研究科における国際学生会議(ICAST)の開催

自然科学研究科 准教授 岸田 光代

さまざまな分野でグローバル化が進む中、専門的な知識や技術を身につけた若者が国際的な視野を持ち問題解決能力やリーダーシップを発揮していくことは、活力のある社会を形成していく上での急務となります。大学院自然科学研究科においても目標の一つに国際的に活躍できる人材育成を掲げ、取り組みを進めているところです。特に2007-2009年には文部科学省に大学院教育改革プログラムとして採択された「グラシウス計画:大学院科学技術教育の全面英語化計画」により、教育プログラムの英語化、海外大学からの招聘教員による講義提供、国際学会での発表や海外インターシップ推進、英語予備教育科目の整備などに力を入れ、プログラム終了後の現在もその活動を引き続き行っています。2008年からは自然科学研究科主催の国際学生会議(ICAST: International Student Conference on Advanced Science and Technology)の開催を始めました。これ

は学生が主体となって運営する会議で、海外協定校などからの学生も交え英語による研究発表を行い、英語力や国際的な場面でのコミュニケーション能力向上を目指すものです。第1回を熊本大学、第2回を北京大学(中国)、第3回を梨花女子大学(韓国)、第4回をエーゲ大学(トルコ)で開催し、平成22年12月に第5回を再び熊本大学で開催しました。それぞれのICASTでは約100-150件の研究発表が行われ、各セッションでは学生が座長も務め、海外の学生を交えた議論が行われています。また、学生交流会ではリラックスした雰囲気の中、その国の文化に触れ学生同士の交流をさらに深めることができます。海外でのICASTへは参加できる学生にも限りがありますが、大学院からの経済支援により、北京大学へは約50名、梨花女子大学へは約100名、エーゲ大学へは約25名の大学院生を派遣してきました。このように積極的に国際的な場を与えることで、学生がその能力を伸ばし、貴重な体験を積む良い機会となっています。またICAST開催を通じ海外協定校との関係も深まり、より有意義な海外ネットワーク構築にも寄与しているところです。今年度は中国の山東大学での開催を予定しています。より多くの学生が興味を持ち積極的に参加し充実したICASTとなることを期待しています。



第8回熊本大学フォーラム（ハノイ）

国際化推進センター副センター長 鳥居 修一
機械システム工学科 教授

2010年12月4日及び5日、ベトナム社会主義共和国ハノイ市において、第8回熊本大学フォーラムが開催されました。同フォーラムは熊本大学の教育・研究活動を内外に紹介し交流を深める目的で2003年から毎年開催しているもので、海外での開催は中国・上海（2005年）、韓国・大田（2006年）、インドネシア・スラバヤ（2008年）に続いて4回目です。

2010年はハノイ建都1000年にあたり、東アジア連携拠点構想の実現、日越の関係強化に対する貢献、熊本大学及び熊本地域全体の存在感をアピールすることによって、将来性のある交流国への早期取組を図る観点から、ベトナムがフォーラム開催地に選ばれました。

フォーラム初日はハノイ建設大学構内の講堂で開催されました。まず、熊本大学谷口功学長とハノイ建設大学Le Van Thanh学長の開会挨拶に続き、古川憲治副学長による大学紹介が行われました。その後、研究・教育の取組が熊本大学、ハノイ建設大学及びベトナム国立大学ハノイ校から紹介されました。更に、熊本大学及びベトナムの大学生ら約60名の口頭・ポスター発表が行われました。ここで一部の司会進行を、現在、ベトナム国立大学ハノイ校及びハノイ建設大学教員として勤務している熊本大学の元留学生にご協力いただきました。

フォーラム二日目は、ハノイ市内のホテルに会場を移して行われました。まず、ベトナム環境資源省のBui Cach Tuyen副大臣の祝辞に続き、在ベトナム日本大使館の谷崎泰明大使、独立行政法人国際協力機構（JICA）ベトナム事務所の清水暁次長、ベトナム国立大学ハノイ校のMai Trong Nhuan学長が祝辞を述べられました。その後、安部眞一理事による熊本大学の教育プログラム、山村研一理事による熊本大学の研究活動の取り組み及び高等教育コンソーシアム熊本の取り組みが紹介されました。

引き続き、大学間交流協定の調印式が執り行われました。既に本学工学部・自然科学研究科と部局間交流協定を

締結して交流を行っているハノイ建設大学とフエ科学大学を大学間交流協定へ移行するとともに、昨年度からJICAとの業務実施契約に基づき、ホーチミン市での技術協力プロジェクト「ホーチミン工科大学地域連携機能強化プロジェクト」に参加しているホーチミン工科大学と新規に大学間交流協定を締結しました。調印式では3校から出席した学長・副学長と熊本大学の学長が和やかな雰囲気の中、協定書にサインし、相互の発展に向けて更に協力していくことに合意しました。

同会場では、前日に引き続き熊本大学及びベトナム国内の大学生による研究ポスターが展示され、学生は熱心に研究紹介を行っていました。更に会場のロビーでは、熊本大学の研究活動のポスターや熊本を紹介するポスターが展示され、更に、熊本県内の大学や企業を紹介するブースも設けられ、100名程の学生が訪れました。

フォーラムの午後の部では、熊本大学での研究の取り組みについて、大学院自然科学研究科の秋山秀典教授及び小池克明教授、発生医学研究所の山村研一教授を紹介し、教育の取り組みについては、大学院自然科学研究科の岸田光代准教授及び図書館長の入口紀男教授が説明しました。引き続き、今回が初めての試みとして、パネルディスカッションが企画され、古川副学長の司会進行のもと、「グローバル化に向けた産学連携の在り方」について、熊本県、熊本市、熊本県内企業、ベトナム国内企業、ベトナム側大学の各関係者により活発な議論が交わされました。

本フォーラムには二日間で当初の見込みを大きく超える約520人が来場し、ベトナム人の熊本大学元留学生も駆けつけてくれました。

今回のフォーラム開催を通じて、ハノイ建設大学をはじめ、ベトナムの各大学の教員、学生、職員と交流を深めることができ、今後の日越の関係強化に向けて大きく貢献できた有意義なイベントとなりました。



西山忠男研究科長による大学院自然科学研究科の教育・研究の紹介（第一日目）



秋山秀典教授によるグローバルCOEの研究活動の紹介（第二日目）

学科便り

マテリアル工学科

平成22年度 学科長 河原 正泰

平成23年3月のマテリアル工学科の卒業生は54名で、この内、40名が大学院に進学しました。進学先は、熊本大学自然科学研究科が37名、他大学3名でした。大学院進学者が多いのは、「不況で就職が難しいから進学を選んだ」と言うよりも、大学院を出た高度技術者を企業が要求していることを学生達が敏感に感じ取っているからだと思われます。一方、今春の大学院マテリアル工学専攻の修了生は26名で、その内の15名が鉄鋼や非鉄金属といった材料関係の企業に就職しました。また、10名が機械や電気関係の企業に就職し、残り1名は博士後期課程に進学しました。深刻な不況の真ただ中ではございますが、本学科ならびに本専攻の卒業生および大学院修了生の就職希望者は、ほぼ全員就職することができました。これは、学生本人の努力もさることながら、各企業で活躍している卒業生のサポートと、本学科の卒業生を高く評価している企業と大学のつながりの賜物だと思っております。

マテリアルという言葉は聞きなれない言葉かもしれませんが、マテリアルとは、私たちの身のまわりにあるさまざまな工業製品に使われている材料のことです。鉄鋼や非鉄金属などの素材産業が「基幹産業」と呼ばれているのは、これらのマテリアル(材料)がすべての産業の基盤になっているからです。高強度なアルミニウム合金で作られた航空機、鉄鋼材料で作られた巨大建築物、高性能半導体によって作られた情報・ネットワーク機器、さまざまな材料が活用されている自動車など、身近なものから宇宙空間に浮かぶ建造物まで、すべては優れた性質をもつ材料によって支えられています。この材料に関する教育・研究分野が「マテリアル工学」です。最近では、「元素戦略」や「機能性材料」、「レアメタル確保」といった言葉から分かるように、マテリアルの重要性が増し、素材そのものの製造から新素材や人間に優しい材料の開発、持続的発展を可能にするためのリサイクル技術

の構築などが求められています。このような視点から、本学科ではマテリアル工学を中心として幅広い分野の知識や技術を修得出来るようになっていきます。また授業だけではなく、すべての学年においてカリキュラムに実験・実習が組み込まれており、1年生から「たたら製鉄」を体験できます。



マテリアル工学科は、採鉱冶金学科としての創設以来、100年を越える歴史と伝統を有しており、これまでに5000余名に及ぶ卒業生を輩出しています。本学科には、エコプロセッシング工学、材料物性学、材料組織・界面制御学、先端材料加工学、環境調和材料学、機能材料設計学の6つの研究室があり、金属を主体とする材料関係の教育と研究を行っています。最近では、KUMADAIマグネシウム合金、太陽電池や燃料電池の材料開発、マイクロマシン/MEMSの材料開発、カーボンナノチューブ、レアメタルのリサイクルに関する研究で、国内外の注目を集めています。これらの活発な研究成果により、熊本大学は全国材料科学分野の大学ランキングで論文引用度数において第3位の地位にあります(大学ランキング2011:朝日新聞出版)。また本学科は、平成16年に九州内の材料系学科としては初めてJABEE(日本技術者教育認定機構)の認定を受け、国際水準を満たした教育プログラムを実施している学科として評価されています。

平成23年4月、マテリアル工学科は新入生および3年次編入生、合わせて約50名のニューフェイスを迎えました。将来、彼らが大きな夢を実現するための力を本学科で蓄えてほしいと願っています。そのために、これからも学科教職員一丸となって、教育と研究に力を尽くす所存でありますので、ご支援、ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

情報電気電子工学科

平成22年度 学科長 西本 昌彦

携帯電話、テレビ、パソコン、デジタルカメラなど「ものづくりの日本」を代表する製品は情報・電気・電子工学分野の高い技術によって支えられています。またこれらの技術は、あらゆる産業の基幹技術でもあります。本学科では、このような分野で創造力を発揮し、多様化する先端技術を開拓できる技術者・研究者を育成することを目指して、教育・研究活動を行っています。

現在、本学科は1学年の学生定員が153名、編入生を含めると4学年合わせて650名余り、大学院生まで含めると850名を越える大所帯の学科です。これだけの学生を教員44名(教授19名、准教授15名、助教10名)、技術職員10名、事務員2名のスタッフでサポートしております。平成23年3月、学部4年生の約6割が大学院に進学し、4割が就職しました。長引く不況にもかかわらず、例年通り就職率はほぼ100%を誇っています。これも本学の歴史と伝統、並びに卒業生の社会における活躍に対する評価の高さに支えられた結果であると、改めて感じています。

さて、この「かけはし」は文字通り、大学と学生のご家族とをつなぐ架け橋となるものとして編集されています。今回はこの紙面を借りて、ご家族の皆様へ本学科のカリキュラムについて、特長的な部分をいくつか紹介いたします。

本学科の扱う教育分野は極めて広範で、4年間でこの分野の全てを学習することはできません。このため、情報、電気、電子という大きな三つの学習分野を設け、分野を選んで重点的に学習できるようにしています。1年から2年の前期までは、三つの学習分野に共通した専門の基礎科目(数学や物理学も含まれます)を学習します。2年後期からは専門性の高い科目を学習

することになりますから、自分の適正や将来の希望を考えながら、主体的に学習計画を立てて、重点分野を中心に学んでいくことになります。3年の終わりまでに必修科目を修得し所定の単位を取得すれば、4年生で卒業研究を行うことになります。卒業研究では、希望する研究室に所属し、指導教員の下で1年間研究を行い、研究の進め方から論文のまとめ方、プレゼンテーションの方法までを体得します。(以上是本学科の専門科目の学習の流れですが、この他にも文学、哲学、経済などの一般教養科目も並行して学習します。)

本学科では、国際的に活躍できる人材育成のため、外国人教授による英語の授業「電気エネルギー先端工学」や「科学技術英語」を開講しています。また、夏休み期間中に企業で実際に就業体験をする「インターンシップ」や、高等学科の教員免許を取得するための教職科目も準備しています。更に、特に成績が優秀な学生に対しては、3年生終了後に大学院博士前期課程に入学できる「飛び級入学」の制度もあります。

現在の学生は、従来の学習内容を2/3に削減した、いわゆる「ゆとり教育」で高校教育を受けてきた世代です。入学時の基礎学力が以前よりも不足しているのは否めませんが、社会が大学卒に要求する学力は以前と変わりありません。このギャップを埋めるためには、大学教育の充実が鍵となりますが、そのためには、大学とご家族の連携が必要不可欠です。この「かけはし」がご家族の皆様のお手元に届くのは大型連休の頃だと思います。「かけはし」に掲載されている記事をきっかけにして、帰省されたご子息、ご息女と大学の勉強や生活、進路についてお話をされてみてはいかがでしょうか。

卒業生からのメッセージ

氏名：小田 祐也 卒業年：2009年
卒業学科：自然科学研究科 博士前期課程 社会環境工学専攻
勤務先：(財)リモート・センシング技術センター、開発部

在学生の皆様、こんにちは。私は今の職場で、人工衛星（または航空機）による地球観測技術であるリモート・センシングに携わっています。聞き慣れない用語かと思いますが、衛星画像解析技術と思っていただければ結構です。



現在は農作地面積を衛星画像から算出する解析業務と地球観測衛星のデータ利用ハンドブック作成業務を主に担当しています。どちらの業務も社内・社外の人達との連携が必要で、困難も多々ありますが、自分の提案や成果が認められたときには充実感があります。衛星画像の利用はまだまだ検証段階ですので、業務を通して衛星画像を実社会に役立てることが私の目標であり、やりがいでもあります。

大学生活は人生の中でも貴重な時間です。勉強に限らずサークル活動やアルバイト等での経験が何かしらの糧になり、大学でのそうした経験が就職や自らの価値観形成に大きく影響を与えると私は実感しています。ぜひ視野を広げ、充実した大学生活をお送りください。

氏名：金子 詩織 卒業年：2009年
卒業学科：自然科学研究科 博士前期課程 物質生命化学専攻
勤務先：同仁化学研究所 品質管理部所属

大学や医療機関等で研究・開発・製造に使用される「試薬」を扱うメーカーに勤務しています。所属する品質管理部では、お客様によりよい製品を提供するため、社内で設けた規格に基づき製品の品質試験を行っています。試験業務以外では、お客様からの問い合わせやクレーム調査、試験法の検討も行っています。入社2年目ですが、問題発生時の原因究明からは正までのプロセスや、新たな分析法を検討し新規格を導入するプロセスにも携わることができ、責任は大きいですがとてもやりがいを感じています。



日々働く中で、自ら考え行動する力(自力)を高めることが重要だと強く感じています。大学・大学院での恩師や研究室メンバーと共に過ごした研究生生活を通し、考える力や人とのコミュニケーションの取り方等多くの事を学ばせて頂きました。大学生活は自力を養う貴重な時間です。色んなことにチャレンジし、多くの経験をして欲しいです。



卒業生の進路状況

就職氷河期のニュースに、学生はもとよりご父兄も不安を感じられていることと思います。非常に低い就職採用率が報じられていますが、本学部を卒業できる人材が働く場所がないほど、日本は人が余っているわけではありません。学生自身の努力や、社会で活躍されている諸先輩方のご支援もあり、工学部の学部、修士とも非常に高い就職率を維持しています。一方、企業が即戦力的に適合できる人材を求めて慎重になった結果、ハードルが高くなっていることも確かです。就職の厳しさが巷に広まるにつれ、今まで以上に安定志向が高まり、学生やご父兄の望む就職先が同じような方向性に集中してしまうことが就職活動を難しくしています。誰もが名前を知っている企業は基本的に、一般消費者に製品を出している会社です。他に、いくらでも知られていない優れた企業は存在します。例えば、部材・製造装置を作っている企業は一般には無名で必ずしも大企業ではありませんが、世界的に見て日本がもっとも高い国際競争力を持つ分野であり、多くの卒業生が働いています。卒業生自身の説明による、そうした企業の学内説明会も数多く開かれています。

自分の知っている世界の中にだけ、答え（将来や就職先）を探そうとする内向的學生を多々見かけます。情報が溢れているためか、自分の見えていない外に世界があることに思いたらないようです。誰もが持ちえる表面的な情報や深みのない嗜好に流されて選んでいるだけなので、自由意思のつもりでも同じ企業に同じような志望動機しか語れない學生が集まることとなります。常に自分の世界を広げようという意識と、知らない世界に飛び出す勇気が大事です。明確な希望を持って臨んでいる學生は幸いですが、結局はその希望を実現するために何を積み

平成22年度 工学部就職連絡会委員長 國武 雅司

あげてきたのかを問われます。積み上げるべきものは、当然単に単位などではありません。どうやって楽をして単位を取るかを価値観としてきた學生にとっては、コペルニクス的発想の転換が求められます。人事の方は選考の際に、まず自分が同僚としてこの學生と机を並べて働く姿を想像してみるそうです。選ぶ側から考えれば当然です。自分が社会人として働いている姿、特に組織の一員として働いている姿をイメージすることが、なにより就職活動の助けになります。

工学部では4年生から研究室に配属され、授業中心の生活から研究室での研究中心の生活に大きく変わります。研究室の一員として役割、責任といったものを経験することは、一般社会への橋渡しでもあります。就職活動を理由に研究室活動をおろそかにする學生もいますが、研究室での生活を自分が社会に出て働いている姿と重ね合わせながら励んでいる學生は、就職活動においても良い成果が出るのは自明の理です。工学部では、ものづくり教育、MOT(技術経営)教育、語学教育、プロジェクト×講演会、インターンなど、學生たちが自主的に自分の価値を高めるための様々なプログラムを用意しています。まじめにきちんと決められたことをこなすことは大事ですが、何をすべきか自分で判断し実行する意欲と能力はより重要です。年功序列も終身雇用も基本的に崩れつつあり、ご父兄が経験した就職体験や企業のよしあしそのものは、必ずしも現状に当てはまるとは限りません。しかし社会(組織)の一員として働くこと、その中で求められる人物像など、もろもろの基本的なことは変化していないはずで、是非、ご経験をご家族で語り合ってください。機会をおつくりいただければ幸いです。

編集委員会

藤原和人、富永昌人、北原弘基、水本郁朗、葛西昭、長谷川麻子、飯田全広、中村能久、岩田一樹、山口一美、野口緑